— 50年の歴史 —

京都府下一斉清掃登山大会

京都府山岳連盟
自然保護委員会

京都府知事のご祝辞

京都府知事　西脇隆俊

京都府山岳連盟による「京都府下一斉清掃登山大会」が50周年という大きな節目を迎えられ、この度、その歩みを記録した記念誌を発刊されますことを心からお祝い申し上げます。

近年、山頂に至ったときの達成感や健康に良いといったことだけでなく、インターネットでつながる仲間との交流や写真映えする景色を求めて、老若男女を問わずトレッキングやハイキング等への関心が高まっていますが、その一方で、一部の心ない登山者によるゴミの放置や不法投棄は絶えず、せっかくの山の魅力を損ねる出来事もしばしば耳にするところです。

そうした中、京都府山岳連盟におかれましては昭和43年から京都府の山岳スポーツの振興のみならず、府内ハイキングコースや山岳・渓流域の保護美化活動を実践され、50年にわたる活動は美しい山岳環境の継承や登山者の環境保全意識の向上につながるなど、その功績は誠に大きいものがあります。また、大きな災害が続く中、昨年の台風21号で府内のトレイルコースが甚大な被害を被った際には、京都府山岳連盟のお力でいち早く復旧・整備が成されました。これまで、御尽力いただいてまいりました京都府山岳連盟会長　四方宗和様をはじめ、会員の皆様の並々ならぬ熱意と御努力に改めて深く敬意を表しますとともに、心から感謝申し上げます。

京都府山岳連盟の皆様におかれましては、今後も美しい京都の山々と自然の景観を後世に残し、府民の誰もが豊かな自然を享受できるよう、また、登山者等のマナー向上に引き続きお力添えをいただければ幸いです。

また、現在建設中の京都スタジアムにおきましては、屋内で唯一国際基準を満たすクライミングウォールを併設することとしています。是非、競技力の向上、次世代クライマーの発掘・育成、クライミング競技愛好者の増加に繋げていただき、新たなクライミング競技の聖地となるよう御活用いただきたいと思います。

結びにあたり、京都府山岳連盟の御発展、会員の皆様の御健勝をお祈りし、お祝いの言葉とさせていただきます。

清掃登山50周年記念誌に寄せて

京都府山岳連盟　　会長　四方宗和

「清掃登山」50 年を機に通史をまとめられたことに敬意を表したいと思います。

50 年前と云えばちょうど私が山岳連盟にかかわり始めた時期ですのでいささかの感慨を覚えますが、その間の歴史的な流れは自然保護委員長である山本氏にお任せして私は私の歩いた視点で振り返りたいと思います。

50 年の間には山岳界（山屋）を取り巻く環境は大きく変わりました。
50 年前は井上靖の「氷壁」、「マナスル登頂」の余韻が残っていた時代でした。そして 40 年前と云えば「3 人寄れば山岳会」の言葉が示すように山岳会がどんどん出来、そこに供給側としては団塊の世代がドッと山岳会に入ってきた、まさに山の世界は大賑わいの時代でした。各山岳会は一般の人を対象に登山バスやスキーバスを出したりもしました。

30 年前は海外登山（トレッキングも）が手軽に行けるようになり京都では国体（1988 年）がありました。当山岳連盟では中央競技団体として山岳競技を受け持ち、それの遂行にあたり岳連傘下の会員の結集を図るためにその 2 年前に「京都府・陝西省合同太白山登山」を企画・実施しました。その時期の山岳連盟の加盟団体は 54 団体（現在は 37 団体）を数えるに至り山岳連盟 70 年の歴史の中でも最も元気で充実していた時期であったと思います。

その後、国体山岳競技は平成 20 年の第 63 回大分国体から種目がクライミングとボルダリングだけになり、皆さんご存知のように今日ではオリンピック競技になるまでに大きく変化しました。文部科学省のもとにある日本体育協会も昨年春には日本スポーツ協会と名を変え上部団体の名称も「日本山岳スポーツクライミング協会」と変えるまでになりましたが、その激変の中でも「清掃登山」は揺らぐことなく山を愛する者たちの山への恩返しとして脈々と続いていることがこの報告書で分かると思います。

ここには西脇知事さまはもとより歴代の知事、担当部署の変わらぬご支援があった賜物と思い感謝いたしております。

これからもこの活動が末永く続くことを願いつつ挨拶といたします。

目　　次

京都府知事のご祝辞
京都府知事　西脇　隆俊　1
清掃登山50周年記念誌に寄せて
京都府山岳連盟会長　四方　宗和　3
目　次　4
はじめに　記録収集の意義について
京都府山岳連盟　自然保護委員長　山本　憲彦　5

1章　清掃活動の歴史
1.1　清掃登山のはじまり　7

1.2　一斉清掃登山の休止期　22

1.3 国体に備えて清掃　30

1.4 清掃登山再開　32

1.5 環境週間に呼応して清掃　34

2章　清掃関連資料編

2.1　年表　40
2.2 清掃登山コースと参加団体の表　41
2.3 ゴミの量の推移グラ　51
2.4 清掃登山の結果報告　55
2.5 清掃活動の写真記録　62
2.6 清掃登山のコースと参加団体一覧表　78
2.7 清掃登山コースの地図　83
2.8 清掃登山に参加した団体の名称　85
2.9 編集委員名　86
2.10 自然保護委員名
2.11 編集後記

はじめに

記録収集の意義について

京都府山岳連盟自然保護委員長　山本　憲彦

この冊子は、京都府山岳連盟が行ってきた清掃活動についての50年間の記録を収録するものです。しかし、それについての通史的な記録が本連盟のどこにもないことに気が付いていました。私はこれを本連盟創立70周年、清掃登山大会50周年のこの年にこそ、最初から50年目の今年までの記録を通史として残しておかなければならない。もし今やっておかなければ、これからの連盟事業や清掃活動の指針が失せた状態のままで推移していくのではないかと危惧しました。連盟員が自然保護や環境保全活動の一環として連綿と実施してきた大きな連盟活動（唯一の全連盟会員団体参加の事業）としての清掃活動の誇るべき努力が誰にも知られずに埋もれたままになるのではないかということも心配しました。

上にも触れたように、限られた資料を堀り起こし、それを時系列に整理して、それぞれに付随するデータを出来る限り裏付けしていくという難しい作業でした。最近10年間の資料は完全に残っていますので、それだけは完全収録しました。

さて、清掃活動記録の詳細は本編で見て頂くとして、私は一岳人として、この50年間を最初に通史的に概観してみたいと思います。この概観を前提に本編の清掃活動の積み重ねを読んで頂くとより一層全体をご理解頂けるのではないかと思います。

さて、1947年（昭和22）に本連盟は産声をあげましたが、最初は「京都山岳協会」でした。その翌年の1948年（昭和23）に「京都府山岳連盟」と改称して、以降今日まで連盟会員である京都府の山岳団体の人たちが主体となって歩んできました。

いつも清掃活動のお世話をさせていただくにつけ、思うことがありました。それは、われわれの清掃活動でのゴミの質や量は、ひょっとするといわゆる「登山ブーム」とその背景にある日本の経済状況に、何らの関係があるのではないか、ということでした。ご存じのように、日本は1945年（昭和20）の終戦直後から急激に復興していき、早くも1950年代から20年以上もの間いわゆる「高度経済成長期」を迎えます。そのさなか、1956年（昭和31）のマナスル初登頂で、第1次登山ブームはさらに加熱していきます。そして、いったんこの登山ブームは1960年（昭和35）頃には下火になりますが、1960年代中頃から1970年（昭和45）代にかけて、第2次登山ブームがやってきます。日本では初めてＴＶで登山番組がいろいろ放映され、それが一般人を巻き込んでいわゆる「大衆登山時代」を迎えます。

この第2次登山ブームで、日本の山岳地帯は大衆登山者を大量に迎えることになります。一番このことが顕著に現れたのは、尾瀬でした。1972年（昭和47）、尾瀬ヶ原の小屋主たちが中心となって、入山者たちのゴミ投棄のあまりのひどさに声を上げます。「ゴミ持ち

持ち帰り運動」です。これに環境省や群馬県などが協力して、全国的に「ごみ持ち帰り運動」が徐々に広まっていきます。

世界的にも地球上の環境汚染が深刻であると共通認識され、1972 年（昭和 47）に、国連において日本の提唱により国連人間環境会議で 6 月 5 日が「世界環境デー」と定められ、日本では「環境の日」として定められます。これが日本中に広がります。そして、日本では 1993 年（平成 5）の「環境基本法」制定につながっていきます。私達が今、毎年 6 月の第一日曜日に「京都府下一斉清掃登山大会」を実施する意味もこれで明らかになりました。

さて、そのころの京都はどうだったかというと、岩場ゲレンデの少ない京都は大原の金毘羅山の岩場が混み合うほどの状況でした。近畿圏からのクライマーたちが押し寄せていたといいます。そして、1968 年（昭和 43）に大事件が起こります。突然にこの岩場ゲレンデが「立入禁止」になります。クライマーたちの傍若無人のふるまいが原因です。神社の神聖な場所である岩場周辺にゴミを放置したり屎尿で汚したり、神社の建物の中で宿泊したりしたのです。神社とそのご神体である金毘羅山を所有する人たちがとうとう我慢の限界を超えてしまったのです。府外の人たちも利用していたのですが、京都府山岳連盟はその仲介に入り、入山できるように難航する交渉をやり遂げました、ゲレンデの定期的な清掃と入山者にそのことを呼びかけてマナーを向上させていくと約束して初めて地元の人たちを説得できたのです。尾瀬ヶ原のゴミの問題よりも 4 年も早く京都では登山者の環境汚染や入山マナーの問題に直面していました。

京都府山岳連盟はその後、金毘羅山ばかりでなく京都府下の主要な山域の清掃活動を続けていきます。京都府も 1973 年（昭和 48）には、6 月 5 日以降を「環境週間」、「環境月間」として全国的に併せて実施していきます。全国的に環境保全や環境問題の意識が高まります。私たちの連盟も府からの補助金を 1977 年（昭和 52）からいただいて清掃活動に気合いが入ります。

日本の経済成長期の後半で第 2 次登山ブームが起こり山域でゴミがあふれるような事態を迎えて、いよいよ国が法律を制定するまでに至ったのは上の通りです。が、その波もオイルショックで下火になります、しかし、再び日本は 1980 年（昭和 55）代から約 10 年間いわゆる「バブル経済期」を迎えます。この 1980 年代から第 3 次登山ブームを迎えます。多くの専門家は、この第 3 次登山ブームは今も続いていると言います。

バブル経済は約 10 年で崩壊します。その後はご存じのように「失われた 20 年」となります。そして今にそれは続いています。

しかし、第 3 次登山ブームの特徴は、たとえば、30-40 代の人たちを中心に登山人口が増えているのです。2008 年（平成 20）から 2009 年（平成 21）にかけての調査では、たとえば、男性は 20 代、30 代、40 代がそれぞれ前年比で 3 倍以上になり、60 代以上も 2 倍以上に。女性は、10 代が 10 倍以上、20 代、30 代がそれぞれ 3 倍以上、50 代が 2 倍以上、60 代以上が 3 倍以上になっています。同時に、登山人口は初めて 1000 万人を優に超えています。（レジャー白書）

思えば戦後第２次ベビーブームの人たちが定年を迎えたのが 2009 年です。上のデータの意味も分かります。今後も世代幅の広いたくさんの人たちが日本の山に入っていく傾向は続くでしょう。

私達はこの冊子で、収集できる範囲でのデータを活用して、京都府下の清掃活動記録を通して、限定的な地域とはいえ、京都府下の山のゴミの様子はどうであったのかを明らかにしていくことにチャレンジしています。それらの分析やデータが明らかになれば、本清掃活動の今後のあり方のヒントにもなると思われます。本連盟の今後の大きな活動指針への重要なファクターにもなるでしょう。

本連盟で活動し、清掃登山大会に参加してきた連盟員のみなさんの 50 年にわたる努力の記録をここに残し、未来に向かって指針として示す事業に従事できたのは、同清掃登山大会をお世話してきた我々自然保護委員会であればこそです。その一員として心より感謝いたします。

京都府下一斉清掃登山大会　――　50 年の歴史――

山の自然に親しむ人々とともに美しい自然を
いつまでもたもつためにゴミをなくす

１章　清掃活動の歴史

1.1 清掃登山のはじまり

1948 年(昭 23)7 月 10 日
京都府山岳連盟が発足した。
1950 年(昭 25)
加盟団体自発的に、山の清掃活動を始める。
1967 年(昭 42)7 月
自然保護委員会発足　委員長　角倉太郎(会長兼職)
1967 年 (昭 42)
美化立標「山のゴミは持ち帰りましょう。」を京都北山･西山･比良山系に設置。
同年
金毘羅山の江文神社周辺で
トラブル発生。
問題点のまとめ

1　ゴミと屎尿の後始末問題が発生（神聖な場所)。
2　拝殿利用・・・登山者が夜分の宿泊場所として利用。
3　社務所の利用・・・登山者が上がり込んで酒宴･寝場所として使用。
4　江文神社前を駐車場所として利用した問題。
5　ゴミ集めの際に、リーダーの欠席のために馬場奥の住宅付近にゴミをおいた。
6　馬場の駐車
馬場の中程に燃料会社が出来て、駐車できなくなった。
7　京都府山岳連盟加盟団体以外の労山他の府県の登山者が乱暴に駐車するようになった。

など京都府山岳連盟が走り回って解決してきた。